

特集

「日本一わかりやすい会計の基本⑫」～ 貸借対照表を作ってみよう！

今、本誌では「日本一わかりやすい会計の基本」というテーマで特集しています。
 前は、貸借対照表について、その構造を説明しました。
 今日は、具体的な事例を使って、実際に貸借対照表を作ってみましょう。

●貸借対照表の構造（5つの区分）・・・前回の復習

資 産		負 債	
流動 資産	現金・預金 受取手形 売掛金 商品 (製品、仕掛品、原材料) その他	支払手形 買掛金 短期借入金 未払金 その他	流動 負債
	固定 資産	建物 設備 土地 投資有価証券 その他	
		純資産	
			資本金 資本剰余金 利益剰余金 評価換算差額 その他
	資産合計	負債・純資産合計	

1. 流動資産

資産の上の箱は、「流動資産」と呼ばれますが、ひと言で言えば、「現金と、その仲間たち」。
 今、「持っている現金と今後1年以内に現金に変わるであろう財産」が記載されます。

2. 固定資産

資産の下の箱は、「固定資産」と呼ばれます。
 流動資産以外の財産です。

3. 流動負債

負債の上の箱は、「**流動負債**」と呼ばれますが、これは1年以内に返済しなければならない借金です。

4. 固定負債

負債の下の箱は「**固定負債**」。
1年以上かけてゆっくり返済すればいい借金です。

5. 純資産

純資産は自分のお金。
中身については、「**資本金（元手）**」と「**その他（儲け）**」と覚えておけば十分です。

●考えてみよう！

あなたは以下の通り、会社を設立し事業をスタートしました。

- ① 1000万円の資本金を用意して、会社を起業しました。
- ② 会社で必要な設備（机やパソコン等）を300万円分購入しました。
- ③ 会社の運転資金として200万円銀行から借りました。
- ④ 商品として、1個20万円のロレックスを20個仕入れました。
- ⑤ 仕入れたロレックスを1個30万円で15個販売しました。
- ⑥ 月末に30万円の給料を払いました。

<問題1>

①～⑥それぞれの時点での貸借対照表はどのようになっていますか？

※資産、負債は流動、固定に分ける必要はありません。

※また、今回は「売り」「買い」「払い」は全て現金取引にします。（掛けは無し）

<問題2>

起業から⑥までの「売上高」「売上原価」「売上総利益」「販売管理費」「営業利益」はいくらですか？

資 産	負 債
	純資産
合計:	合計:

売上高
売上原価 _____
売上総利益
販売管理費 _____
営業利益

●解答

<問題1： 貸借対照表の作成>

①1000万円の元手でスタート！

資産		負債	
現金・預金	1000		
		純資産	
		資本金	1000
合計	1000	合計	1000

②300万円分の設備を購入！

資産		負債	
現金・預金	1000		
	-300		
	700	純資産	
設備	300	資本金	1000
合計	1000	合計	1000

③200万円の銀行借入れ

資産		負債	
現金・預金	1000	借金	200
	-300		
	200	純資産	
	900	資本金	1000
設備	300		
合計	1200	合計	1200

④商品の仕入れ(20万円×20個)

資産		負債	
現金・預金	1000	借金	200
	-300		
	200	純資産	
	-400	資本金	1000
	500		
設備	300		
商品	400		
合計	1200	合計	1200

⑤商品の販売(30万円×15個)

資産		負債	
現金・預金	1000	借金	200
	-300		
	200		
	-400	純資産	
	450	資本金	1000
	950	利益	150
設備	300		
商品	400		
	-300		
	100		
合計	1350	合計	1350

⑥給料の支払い

資産		負債	
現金・預金	1000	借金	200
	-300		
	200		
	-400	純資産	
	450	資本金	1000
	-30	利益	150
	920		-30
設備	300		120
商品	400		
	-300		
	100		
合計	1320	合計	1320

ちなみに、この場合の利益は

売上高	450	...30×15
売上原価	300	...20×15
売上総利益	150	
販管費	30	...給料
営業利益	120	

損益計算書と貸借対照表は「利益」でつながっている！

上図を参照ください。

- ① スタート段階では、左側の財産は現金・預金の1,000万。一方、右側は、純資産の欄に資本金が1,000万円入ります。
- ② 300万円分の設備は、財産ですから左側の財産欄に加わります。この300万円の設備は、自社の現金で買ったもの。従って、その分の300万円が現金から引かれます。この取引は、現金という形で持っていた財産が、設備という形に変わっただけ。財産総額としては変化がありませんので、右側は①のままで変わりません。
- ③ 200万円の現金が増えるので、財産総額も200万円増加します。お金の出所は借金ですので、負債の欄にも200万円が入ります。
- ④ 商品は財産ですので、400万円分が加わります。この商品は現金で買ったのもです、その分の現金が減ります。②同様、財産総額は変わりません。

- ⑤ ここが一番悩ましいところでしょう。
 まず、30万円で15個売れたのだから、現金が450万円増加します。
 一方、商品は15個分減りますが、5個はそのまま残るので100万円。
 この段階で財産総額を計算すると、合計で1,350万円になります。
 ④の段階では、右側は1,200万円でしたので、このままでは150万円不足です。
 その差は利益。
 純資産に利益分が150万円加わり、総額が1,350万円
 これで左右がバランスします。
- ⑥ 給料分30万円が現金から引かれます。
 そして、利益も30万円減少するので、左右の合計は、それぞれ1,320万円になります。

<問題2： 損益計算書の作成>

売上高	450万円	・・・	30万円	×	15個
売上原価	300万円	・・・	20万円	×	15個
売上総利益	150万円				
販売管理費	30万円	・・・	給料分		
営業利益	120万円				

上記が解答です。

「あれ？ 販売管理費には、設備の300万円は入らないの？」
 このように考える方もいるのではないですか？

販売管理費の「管理費」は、会社を運営するために使った費用。
 机やパソコンも、確かに会社を運営するために必要なものです。
 しかし・・・

この段階では、300万円は販売管理費には入れません。
 もったぶった言い方になりますが、その理由は「次回」の本誌で説明します。

さて・・・

結論として、営業利益は「120万円」。
 この「120万円」って、どこかで見た覚えがありませんか？
 そう、貸借対照表の純資産の中の「利益」がちょうど「120万円」でしたよね。
 これって偶然でしょうか？
 いやいや、まさにこれは「必然」です。

損益計算書と貸借対照表は、同じ親から生まれた兄弟。
 当然、どこかでDNAがつながっていなければなりません。
 そのつながりが、まさに「利益」なのです。
 「損益計算書の利益が、貸借対照表の利益の欄に流れ込む」
 こんなイメージを持つといいでしょう。

ただし・・・

今回のケースで、損益計算書の利益の120万円と、貸借対照表の利益の120万円がピッタリ一致しているのは、創業初年度だからです。
 貸借対照表の利益は累積ですので、2年目以降の利益は、120万円に上乗せされます。
 この点は誤解の無いようにしてください。

<続きは次回>